

令和八年三月

大学院文学研究科

佐々木 聖佳 提出・学位申請論文（論文博士）

『風流踊りの研究』 審査報告書

國學院大學

佐々木 聖佳 提出・学位申請論文（論文博士）

『風流踊りの研究』 審査要旨

本論文は、「風流踊り」という芸能について、形成から展開に至るまでの諸相を明らかにし、日本文化史に位置づけていくことを目的とするものである。

「風流踊り」とは、一般的には「室町時代末期から安土桃山時代、江戸時代にかけて流行し「風流」の趣向が施された華やかな踊り」で京都を中心に流行した芸能である。おもに盆の時期に、皇族や貴族、武家、町衆たちが、思い思いの「風流」の趣向を凝らした豪華な踊りを仕立てて踊りを掛け合った。こうした「風流踊り」は江戸時代初期には流行が終焉し姿を消していくが、地方にこれを受け継ぐ踊りが伝わり、盆の供養や雨乞いなどに奉納されて江戸時代を通じて盛んに踊られた。そして、現代に至っても西日本一帯に数多く伝承されている。このような京都周辺ではない地方に伝承する民俗芸能の踊りもまた風流踊りと呼ばれているが、十六世紀に京都を中心に行われた「風流踊り」との

関係については明確には解明されてこず、個別に研究が行われてきた。つまり、具体的にはどの芸能をさして、「風流踊り」と呼ぶのかは曖昧なのである。佐々木氏は本研究をなすにあたって、これまで風流踊りの研究のなかで考察対象としてほとんど着目されなかった「踊り歌」を、芸能の重要な構成要素の一つと捉え、「風流踊り」を「風流踊り歌群」の曲を共有する踊り」と定義した。今日の「風流踊り」と呼ばれるものの芸能は多種多様で、踊られる機会も楽器も様々であるが、踊り歌が共通しているという特徴からそのように定義しているのである。そして、そのようにすることによって、本来の「風流踊り」と、伝播した「風流踊り」の両者の関係を明らかにし、都市の「風流踊り」から地方に民俗芸能として定着した「風流踊り」に至る、風流踊りの形成と展開の諸相を考察している。

研究方法としては、フィールドワークによる調査と文献資料の分析という従来の民俗学の手法に、詞章の分析と解釈という歌謡研究からの方法を取り入れ、文献史料、詞章、音楽（拍子等）、芸能、地元の伝承などを総合的に考究

することをめざしている。

論文の内容の要旨

本論文は二分冊となっており、「I」は「風流踊りの形成と展開」の論考、「II」は「I」で論じた研究の基礎となったフィールドワークに基づく調査報告や踊りの詞章を収録する「風流踊り歌の民俗誌」から構成されている。

「風流踊りの形成と展開」の構成は、「序章」で論文の目的や方法、研究視点を論じ、続く本論第一部「風流踊りの形成と展開」で十六世紀に京都を中心に踊られた風流踊り、第二部「風流踊りの民俗と伝承」で民俗芸能の風流踊りを考察対象として論じる二部構成である。

「風流踊りの形成と展開」の序章では、「風流踊り」を「風流踊り歌群」の曲を共有する踊り」と定義している。「風流踊り」は従来、芸態、採り物、踊る機会などによって分類されてきたが、芸態が多種多様であるために適切な分

類が困難で、明確な概念規定がなかったが、踊り歌は踊る機会、楽器、芸態等が異なっている、ほとんどの伝承地で共通している。それには、他にはない独特な「組歌形式」、各歌の末尾につく共通の繰り返しの詞章、常套句などの表現様式に共通点があり、全国に比較し得る共通の風流踊り歌が存在しているとし、本論文ではこの共通する曲を「風流踊り歌群」と呼称している。芸態の差異よりも、「風流踊り歌群」の歌が歌われているかどうかという観点で、「風流踊り」は拍子物や他の芸態などと区別でき、「歌」の様式によって、「拍子物」、「拍子物からの過渡期の踊り」、「風流踊り」、「風流踊りから展開した踊り」に分類できることを提示し、これを変遷の過程として論じていくのである。この議論は、山路興造氏が示した民俗芸能の風流踊りは「風流踊り歌というジャンルの踊り歌を歌う芸能」であるという理解と、植木行宣氏が示した「風流と総称される民俗芸能は、組歌形式の踊り歌を持たぬ拍子物と踊り歌を共有する風流踊りに大別される」とした論に、独自の變遷過程を想定して四つの分類を示す本論文の核となる部分である。

第一部「風流踊りの形成と展開」では、記録に現れる十六世紀の京都の風流踊りを主な対象とし、十六世紀の京都において風流踊りが、楽器と踊りと歌で囃す「拍子物」をその前段として、そこから芸能として風流踊りがどのように形成され、展開していったかを考察する。

第一章「風流踊り歌の形成」では、風流踊りの形成の時期を歴史資料から分析し、「拍子物」を中心としながら踊りの要素が大きくなっていく時期（大永頃）、「風流」と呼ばれて踊りが中心になっていく過渡期にあたる時期（天文頃）、「風流踊り」としての芸能と歌の形式がほぼ完成する時期（永祿頃）を画期と捉えて、それぞれの時期の歌謡資料を検討することによって、風流踊りおよび踊り歌がどのように形成されていったかを各節の論考により考察する。この第一章の考察によって、「序章」で提示した分類は十六世紀の京都の風流踊りの変遷を考察する上でも有効であり、風流踊りの形成過程が明らかとなったとする。また、「序章」で指摘した「風流踊り歌群」の歌で今日の民俗芸能として残るものは、早いものでは永祿期から形成されていたことになるとしている。

第二章「狂言と風流踊り歌」では、風流踊りと狂言との関わりについて、狂言「若菜」と「靱猿」から考察する。室町時代初期におこった狂言は、その後同時代の芸能や歌謡を取り入れて展開、整備されていったが、同時代に流行していた風流芸能も取り込んでいる。組歌形式の風流踊り歌を取り込んでいると認められるのは狂言「靱猿」であるとする。第三章では、京都や江戸で流行した風流踊りが、終焉期に至ってどのように形を変え、どのように地方に展開していったかを武家との関わりの中で考察を展開する。

第二部「風流踊りの民俗と伝承」は、民俗芸能の風流踊りを対象としている。まず、民俗芸能の風流踊りは、都市の風流踊りが地方に伝播したものであるとする。そして、その土地の実相に応じて、雨乞いや盆の供養といった様々な民俗儀礼や言い伝えなどの民俗伝承を伴いながら伝承されている。風流踊りの一定の地域への伝播は、拍子物から風流踊りが形成されていく過渡期の踊り、形式が完成した時期の風流踊りなど、風流踊りが形成されていく諸段階の芸態が波状的に伝わり、地域の事情にあわせて重層化、複合化して民俗化していった

と考えられるとする。佐々木氏の民俗芸能の風流踊りの古態の分析は、そのような風流踊りの歴史的展開を、地域の民俗としていかに受け止めたかを考察したものとなっている。

「II」の「風流踊り歌の民俗誌」は、風流踊り研究のために三重県伊賀市、奈良県奈良市、岐阜県揖斐郡揖斐川町など近畿地方とその周辺域で行った風流踊りおよび風流踊り歌の調査記録をまとめたものである。

第一部「風流踊りの諸相」には、現地調査による芸態や歌の観察、聞き取りを元にした調査記録、第二部「風流踊り歌の諸相」には調査によって蒐集した歌謡詞章を収録している。本論文の各論考の基礎にはこのフィールドワークによる調査があり、本研究の基礎資料と位置づけられる。「I」において歴史的に確認される変化の過程にある風流踊りの形を、現状の民俗芸能にその姿が確認できるものとして挙げられているが、それはこの「II」に記された民俗誌とフィールドワークによって蒐集した歌詞詞章を元にして検討した結果である。

論文審査の結果の要旨

風流踊りとは、一般的には「室町時代末期から安土桃山時代、江戸時代にかけて流行し「風流」の趣向が施された華やかな踊り」をさすが、具体的にはどの芸能をさして、何をして「風流踊り」と呼ぶかは曖昧である。ユネスコ無形文化遺産登録となった風流の芸能をみても、それはあまりに多彩で風流という芸能としての定義は曖昧である。

本論文の前提となるものは、その対象を「風流踊り歌群」の曲を共有する踊り」と定義したことである。風流踊りと呼ばれるものに限定しても、その芸能は多種多様で、踊られる機会も楽器も様々であるが、踊り歌が共通しているという特徴からそのように定義している。その前提には、山路興造氏の風流踊り論がある。応永から永享にかけて念仏拍子物が踊りに変化を見せ始め、文明年間頃に盆の拍子物が現れて踊りの要素を広げるようになる。従来の拍子物系の芸能が中踊りとなり、踊り衆が側踊りとしてそれを取り囲むという風流踊り

の姿に整えられていく。そうして盛んに踊られるようになった風流踊りも、慶長九年八月に豊臣秀吉の七回忌を期して行われた豊国神社臨時祭礼の風流踊りをもって終焉期を迎えるというのが山路氏の所説である。山路氏はこの変化について、「風流踊り」という芸能に曲名がつくことによって判断している。佐々木氏はこの山路氏の所説を歌謡分析の手法を用いることで展開させている。

一般的に芸能史研究においても民俗芸能研究においても、芸能の歌を分析する手法が極めて少なく、芸能そのものにおいては芸態、またその芸能が伝承される場や信仰、伝承などの分析に力点が置かれており、歌の詞章の分析や比較研究は等閑視されてきた。山路説も歌謡のあるなしを基準とするが、歌謡の中心には言及していない。佐々木氏はそこに歌謡研究の視点で分析するという立場を提示して、歌謡をもとにした通時的・共時的比較研究を展開している。要するに、歌謡をもとにした芸能史研究と民俗芸能研究の合体を試みているのである。

まず、現在に伝承される歌を伴った民俗芸能の風流踊りを徹底して調べる

と、伝承曲は「忍び踊り」「ひんだ踊り」「小原木踊り」「うわなり踊り」などの典型的な類型曲が含まれていることを指摘する。さらにそれらについて分析し、五つの共通する特徴を挙げて、これらを他の風流系の芸能とされる拍子物などと区別して対象を確定させている。

これを前提として、芸能史としての風流踊りの分析については、前述の山路氏の十六世紀の京都の風流踊りについての分析を踏まえた考察を展開する。『言継卿記』などの記録で、風流芸能に対する語が「拍子物」「風流」「踊」と変わっていくことに注目し、「拍子物」「踊拍子物」「風流」「風流踊り」という変遷を想定して、山路氏の拍子物から風流踊りに展開する変遷論に過渡期を想定している。そして、『言継卿記』永禄九年紙背の小歌として知られていた歌謡資料が、内容も形式もほぼ一致する民俗芸能の風流踊りが複数箇所を確認できることから、これが当時の風流踊り歌を記したものであることを指摘している。そして、以降の様々な記録に残された歌謡が今日の民俗芸能に残されていることから、永禄から天正にかけて踊り歌が京都で作られ、人々に受け入れられたものが繰

り返し踊られて、「風流踊り歌群」が形成されていったとするのである。このことについてはさらに資料を用いて、風流踊りが広まっていく状況を論じている。

一方、民俗芸能としての風流踊りについては、風流踊りの現在の比較検討から植木行宣氏が提示した「民俗芸能分布圏試論」を踏まえ、まずは民俗芸能の伝播のあり方を「風流踊り形式が成立する以前の過渡期の芸能の踊りも、段階的に、波状的に地方へ伝播し、それにそれぞれの地域の特色が加わり、両方の要素を持ち伝えて継承されてきた」ものとする。そして、現在に残された風流踊りを、先の「拍子物」「踊拍子物」「風流」「風流踊り」という変遷に合わせて分析している。

佐々木氏の研究は、風流踊りの変遷を歴史的な分析と民俗芸能の比較検討からこれを一体のものとして論じ、風流踊りという芸能を明らかにすることに成功したものと位置づけることができる。山路氏が「風流踊り歌群の歌謡を使用する民俗芸能を風流踊りとする」と定義した大雑把な風流踊りの定義を梶子に、いわば「風流踊り歌をメルクマールとして風流踊りの歴史を形成と展開という

視点から位置づけていく」という方法で取り組んだのが本論文である。佐々木氏の見渡せる範囲でほぼその目的を達成し、成功したと言って良いだろう。言い換えれば「風流踊り歌を歴史的に位置づけることによって風流踊り歌を使用する風流踊りの形成と発展を見事に描くことに成功した」ということである。

ただし、方法論的にはいくつか考察を加える必要があると思われるので、以下二点について述べる。

①風流踊り歌について「組歌」もしくは「組歌形式」という術語を用いて歌謡群のまとまりを説明しているが、歌謡群を「組」ないし「組歌」という言葉で捉えるという概念は、早くても風流踊り歌が出現してから数十年後の三味線組歌、もしくはその後の箏曲組歌から出現するのであるから、果たしてそのような語を用いて考えるのが適当であるか基本的な検討が必要ではないか。

②風流踊り歌は出現当時から五首でひとまとまりという形式を取り、その形式は後世まで受け継がれ、また民俗芸能へも大きな影響を与えたが、それは何故ゆえであろうか。「組」「組歌」という語を用いはじめた三味線組歌・箏曲組

歌ではそのような形式は崩れていることと相まって、風流踊り歌の五首形式の持った力について、もう少し考察が必要になるだろう。

そのような点を踏まえた上で、佐々木氏には是非「風流踊り歌の歌謡史」を記述して欲しい。

また、風流踊りと呼ばれる歌謡を伴う舞踊については明らかにできたとしても、風流という文化現象とそれによって多様に展開した風流文化の全体像を捉えた上で、風流踊り歌に特化した研究に展開することを期待したい。そのためには、例えば九州の風流踊りや他ジャンルの民俗芸能との比較検討が必要であろう。また、歌謡という面からの考察で一つの達成をみたが、絵画資料などを用いて、芸態面からの言及も必要であろう。

また、佐々木氏の研究は民俗芸能の立場からいうと、各論が精緻であるだけに今後の展開に期待するところが大きい。まず、風流踊りと規定した踊り群が持つ多様な名称についての分析が求められよう。そして、植木氏の「民俗芸能分布圏試論」を、芸能史として分析した自らの論で点検し、それを補填して各

論として様々に論じているのだが、それによって人文地理学的な分析などの展開や地域における伝承論すなわち伝承地・芸能間の影響などの議論が展開されても良いであろう。また、本論文には近畿地方の風流踊り系の芸能に伴う歌謡が網羅的に収められているが、今後の研究のために利用しやすいような整理や検索できるデジタル化なども望まれるところである。

しかし、本論文に収録された長年にわたって風流踊りの研究に携わって網羅的に採集された歌謡の記録は、今後の研究に寄与するところが極めて大きい。また、芸能史研究と民俗学（民俗芸能研究）を一体化して論じることおよび地域研究から脱したものとするのがそもそも困難なのであるが、そこに風流踊り研究ではあまり用いられなかった歌謡研究の手法を持ち込んで達成した成果は、確実な新たな知見をいくつも有しているとともに、今後の芸能史研究と民俗芸能研究に提示した新たな視座を示している。よって本論文の提出者の佐々木聖佳氏は、博士（文学）の学位を授与されると判断される。

令和八年三月十日

主査	國學院大學	教授	大石	泰夫	印
副査	國學院大學	教授	岩崎	雅彦	印
副査	獨協大學	名誉教授	飯島	一彦	印
副査	武蔵大學	教授	福原	敏男	印